

他力

―位職便り―



第十八号（令和元年八月）
専徳寺住職 弘中満雄

【二つの卒業式】

ラジオでこんな話を聞きました。

高校三年生の双子をもつ母親が、二人のそれぞれの高校の卒業式に出席しました。

最初の卒業式で、校長先生は、

「これから君たちは社会に出たら、ちた一人です。すべて自己責任です。しっかりやんなさい。」

確かにその通りですが、少し寂しいなど母親は思ったそうです。

ところが次の卒業式の校長先生は、

「これから君たちは社会に出たら、ちた一人です。でも、そこにはたくさんの方たちの先輩がいます。一人ではありません。」
涙がこぼれたそうです。

「二人の息子の通ったそれぞれの学校。公立と私立の違いこそあれ、見た目はとても似ていたけれど、中身はずいぶん違うなど感じました。」

【お葬式】



最近の葬儀（告別式）にはたいがい司会者がいてくれます。通夜と葬儀を厳粛にすすめてくれます。

ある葬儀社の司会者は、とても丁寧です。読経前に故人の人柄を偲ぶナレーションをしてくれます。

しかし読経後、献花が終わり、棺のフタを閉めた後、その司会者はいつも、

「人は記憶の中で生き続けると申します。

皆様の中で、故人がずっと生き続けますよう

念じまして……合掌」

気持ちには分かりますが、少し違うなと思いつつ聞いています。

さて先日の葬儀の司会者。フタを閉めた後、こう言いました。

「では皆様、正面を向かれまして……合掌」
その言葉に全員、棺ではなく、本尊に向かって礼拝。見事でした。

【月をさす指】

熊さん 「見て「らんよ」」

与太郎 「ほお、太い指だね」

熊さん 「違うよ。指の先だよ」

与太郎 ツメが伸びてる」

熊さん 「その先！ 月が見えるだろ」

与太郎 「いや、ツメの先には、垢が見える」

落語の一場面です。熊さんは月を指しているのに、与太郎は指ばかり見えています。葬儀の場面。故人も月を指しています。

「人は記憶の中で生き続ける」

……大切な故人の記憶ですが、悲しいかな、刻々と不鮮明になるわが身です。

今生の最後、仏の救いを身にかけて示す故人でした。棺の中の動かない手は、お荘殿の中心にご安置するみ仏を指しています。「あなたも、見て「らん」と、穏やかな顔から、故人の願いを聞きます。

「すべて自己責任。しっかりやんなさい」

そんな自業自得の道理にのっとり、日々の破戒の結果、天国どころか地獄への着実な道を歩む私を今、月の光、弥陀の救いの光がつつんでいます。

「一人ではありません！」

一人生まれ、一人死ぬと諦めていました。しかしそんな私を「かならず



仏の国「浄土」と喚ぶ、弥陀の大悲がある事を、故人は示しているのです。（終）